

シリーズ●北海道の天然記念物

特別天然記念物 アポイ岳高山植物群落

アポイ岳ファンクラブ

水野 洋一

アポイ岳（標高 810.5 m、一等三角点）は、北海道日高地方の様似町の南東、海岸線から 4 km の距離に位置しています。北はピンネシリ岳をへて日高と十勝を境とする日高山脈に連なり、東は幌満川に接し、南は太平洋に面しています。

アポイ岳は、かんらん岩質の特殊な土壌や特異な気象条件により、固有種を含め 80 種以上の高山植物が生育しています。アポイ岳の高山植物群落は、1939（昭和 14）年に国の天然記念物に指定され、戦後の 1952（昭和 27）年、道内のマリモ・タンチョウ・野幌原始林とともに、特別天然記念物に指定されました。また、一帯は「国定公園特別保護地区」であり、「日本の地質百選」や「花の百名山」にも選ばれています。

アポイ岳の「アポイ」は、アイヌ語の「アペオイヌプリ（大火を焚いた山）」からきています。アイヌの口碑伝説では、「その昔アイヌの人々の主要な食糧であったシカが獲れなくなり、アポイの頂上に祭壇を設け、カムイ（神）にシカの豊猟を祈った」ところとされています。

国内ではアポイ岳でのみ生息が確認されている高山蝶「ヒメチャマダラセセリ」、アポイ山麓の幌満川流域にある「幌満ゴヨウマツ自生地」は、いずれも天然記念物に指定されています。

アポイ岳植物調査研究の歴史

アポイ岳の植物を最初に調査した人は、札幌農学校教授の宮部金吾博士です。それは、1884（明治 17）年、様似まで鉄道が開通する半世紀以上も前の不便な時代のことでした。博士は、北海道と南千島の植物標本を採取する計画をたて、札幌を出発し様似に来て、様似山道を通り、多くの植物を採取しました。

けれども、アポイ岳の全体の植物を対象に調査を試みた最初の人、館脇 操博士です。博士は 1927（昭和 2）年と翌 1928 年、4 回にわたりアポイ岳の山麓から頂上まで詳しく調査し、その結果を「日高様似アポイヌプリの植物」という論文と

して発表しました。これをきっかけに北海道大学では、宮部・新島両教授を中心に、アポイ岳の植物を保全しようという声が高まりました。

その後、原 寛博士（当時、研究生）は、師である中井博士の薦めにより、様似郡・幌泉郡・浦河郡（現在の様似町・えりも町・浦河町）を 3 か月踏査し、卒業論文「南部日高の植物・予報」（英文）を提出。この論文が数年にわたり学会誌に掲載され、掲載が終わった 1939 年、アポイ岳高山植物群落は天然記念物に指定されたのです。

ところで、アポイ岳の植物に関わり、忘れてはならない人がいます。アポイ岳の麓にあった冬島小学校の対馬正雄校長は、館脇・中井・原博士にアポイ岳の植物標本を送ったり、調査に同行したりするなど、調査・研究に協力しました。それゆえ、中井博士は、報告書のなかに「対馬先生こそ、アポイ岳の植物群落の価値を学会に紹介した人である」と記しています。1964（昭和 39）年、対馬校長の功績を末永く称えるため、対馬校長の句「空晴れて／至宝アポイ／吾を呼ぶ」を、館脇博士の筆で記した碑が旧登山道入口（現在のアポイ岳ジオパークビジターセンター横）に建立されました。

しかし今、アポイ岳はたいへんに傷つき瀕死の状態です。ある著名な研究者は、「アポイの花々の数は、特別天然記念物指定当時の 5 分の 1 にまで減っている危機的状況である」と警鐘を鳴らしています。



● 地域住民を主体としたアポイ岳の保護活動

1996(平成8)年6月、1997年5月と、2年連続して高山植物の大量盗掘事件がおき、マスコミでも大きく取り上げられました。北海道は地元様似町や関係機関に協力を求め、事件発生10日後「アポイ岳保全対策協議会」を立ち上げ、アポイ岳の高山植物保護・保全の活動に着手しました。

一方、盗掘や登山客の増加によるお花畑や登山道の荒廃など、アポイの課題や将来を住民自ら考え行動する場を作ろうと、その年の秋、32名の会員で設立したのが「アポイ岳ファンクラブ」です。

ファンクラブは会則で「アポイを愛し、アポイがいつまでもアポイであり続けるために活動する」とうたい、アポイの動植物や岩石の研究から登山者の調査、学習会の開催など幅広い活動をめざし、現在まで活動を続けています。

近年、大規模な盗掘にかわり、ササやハイマツが勢力をのびし、高山植物の花が減少するという新たな課題が浮かび上がりました。

これに対し、「アポイ岳を特別天然記念物に指定された1952年当時の姿に再生」しようと、「カムバック1952アポイ岳再生委員会」が2005年2月設立されました。アポイ岳ファンクラブを中心に、様似町や様似町教育委員会、そして12名の植物研究者で構成され、北海道日高振興局や日高森林室、北海道教育委員会日高教育局がオブザーバーとして参加しています。

特別保護地区に隣接するアポイ岳五合目直下の王子製紙(株)の社有林を借用し、約200m²の再生試験地を設け、防鹿柵で囲ってササなどの植物をいったん除去し、花の生育状況を観察するなど、お花畑の再生方法を検討しています。

2011年、再生委員会副会長の増沢武弘静岡大学理学部教授(現静岡大特任教授)が、新たな提案をしました。それが「アポイドリームプロジェクト」です。「冬の北海道の家のなかは暖房がきいていて、本州の人からみると驚くほど暖かい」ことを知った増沢教授が、冬期間各家庭の室内でアポイ岳の高山植物を種から育て、春になったら苗を再生試験地に移植する試みです。地元様似中学校の生徒を含め、多くの住民が参加し、現在も継続して取り組んでいます。

● むすび〜ふるさとの先人の言葉をお借りして

アポイ岳は、東にある幌満岳(約685m)と対峙

しています。この二つの山の間を流れる幌満川には、1935(昭和10)年から1954(昭和29)年の間に、3か所の水力発電所を、日高地方の本格的な電源開発を志して本州からやってきた手塚信吉による、当時けっして大企業とは言えない小さな企業が作りました。

1952(昭和27)年、天然記念物地帯の真ただ中に新発電所を建設するための障害木である天然記念物を伐採する許可権は、国の文化財保護委員会にありました。北海道でただ一人の委員、北大教授館脇博士に特別に現地調査を早めてもらった際、次のようなやりとりがあったことが、手塚信吉の著書『幌満川』に記されています。

『(前略)筆者(手塚)は事業熱心のあまり、「日本は負けて領土も植民地も失い、狭い国土に九千万人、人口を養うためには産業開発は急務中の急務であり、天然記念物など眺めて楽しんではおけません。大乗的見地に立って早く許可されるようご尽力願いたい。」と正直、率直にやってしまった。博士は憤然として、「そんなことをいうと、五万年後の子孫にまで恥さらしになるぞ。産業の大切なことは我々も承知しているが、貴重な資料を保存し後世につたえることは現世人の義務だ。そのために自分らは日夜苦心している。」とたいへんなお叱りである。科学者の立場からいえばまことにごもっとも、この失言は即座に取り消し、陳謝してことなきをえたが、そのとき種々専門的な説を拝聴した。「幌満川付近は地質学的にも、植物学にも貴重な資料の宝庫である。往古北海道とシベリア大陸が陸続きあったことも、ここにきて立証しうる。したがって、考古学的にも無疵のままに残しておきたい。産業だ、経済だと無心に破壊されていくことがいかにも残念でたまらない。」と唯ごもっともな意見、つつしんで拝聴するばかり。(後略)』

昭和初期に建設された幌満川の水力発電所は、あの3.11大震災の後、再生可能エネルギーとして大きく脚光を浴び、今まさに電力発送電分離の政策のもと、大きな改修工事が実施されています。

我々ファンクラブの老兵も、だいたい傷つき消え去ろうと思いましたが、老体に鞭打ちもう一度頑張ろうと思うこの頃です。

参考文献

様似町史編さん委員会編(1962) 様似町史. 様似町
様似町史編さん委員会編(1992) 改訂様似町史. 様似町
様似町史編さん委員会編(1993) 新様似町史. 様似町
高橋 誼・田中正人(2003) アポイ岳の高山植物と山
草. アポイ岳ファンクラブ発行.
手塚信吉(1961) 幌満川. ダイアモンド社.